

兵藤釗〔聞き手・野村正實・上井喜彦〕『戦後史を生きる——労働問題研究私史』<sup>2</sup> を読んで

日本を代表する労働問題研究者の回想（二人の弟子による聞き書き）である。

一般に学者の回想というものは、第一義的には当該分野にかかわる学説史的な関心から読まれることが多いだろうが、より広い社会史や精神史という角度からも興味深いものたりうる。私はある時期、労働問題をかじっていたことがあり、「労働問題研究会」という会にもしばらく属していた（その後、だんだん遠ざかり、いまでは別の世界となっていた）。東京大学社会科学研究所（社研）の助手を数年務めていた関係で、当時社研にいた戸塚秀夫、山本潔の両氏にはいろいろと教えていただき、大変お世話になった（氏原正治郎氏は当時もう定年間で、それほど身近ではなかったが、お目にかかる機会が多少はあった）。それに比べると、経済学部にいた兵藤釗、中西洋両氏との接触はそれほど密でなかったが、それでもある程度は接する機会があった。（この回想の聞き手である野村・上井両氏も同様）。その意味で、この回想（聞き書き）には、「昔ちよつとだけ接したものに久しぶりに巡り会った」という懐かしい思いを誘われた。

兵藤氏は一九三三年生まれで、私よりも一五歳歳上だが、一五歳という年齢差は、「隔絶している」というほど遠くはないが、「身近」というほど近くはないという意味で、やや中途半端な距離である。この回想のうち、若かりし頃の著者について述べた箇所は私にとってなかなか想像しにくい遠い過去の話と感じさせられるが、大学院に入学して研究者としての道を歩み始めて以降については、直接は知らなくても何となく想像がつくことや、聞いた覚えのあることが増え、距離はあっても広義の「同時代」という感覚をもって読むことができた。

労働問題研究から遠ざかってしまった私にとって、本書の中心部分をなす学説史的な箇所は十分咀嚼することができない（学説とは別に、経済学部における師弟関係や人脈などに関わるエピソード類で面白い話は随所にあるが、そういうことについて私がここで一々書き記す意味はないだろう）。そのため、兵藤氏の研究の内容に即した感想を述べることはできないが、その背景ないし周辺、とりわけ政治運動との関わりについて、いくつかの感想がある。こういう読み方は著者にとつては本意かもしれないが、労働問題という分野はどうしてもその時代の政治と無関係ではないことを思えば、そうした点に関心が向いてしまうのもある程度までやむをえないことではないかと思われる。といつても、著者が政治にのめり込んでいたということではない。むしろ、あちこちで政治と関わっていないながら、意外なほど距離をおいていたというのが本書から浮かぶ全般的印象である。

早い時期についていうと、戦後初期という特異な状況の中で、文学少年から左翼少年に

\* 兵藤釗〔聞き手・野村正實・上井喜彦〕『戦後史を生きる——労働問題研究私史』同時代社、二〇一九年。

\* 兵藤氏の代表作『日本における労資関係の展開』（東京大学出版会、一九七一年）はもちろん私も一所懸命読み、かなり影響も受けたが、それは刊行後大分経ってからの独学であり、内容について著者から直接話を伺ったことはない。

なり、旧制中学（まもなく新制高校となる）で共産党に入ったことが語られている。もつとも、当時マルクス主義文献はほとんど読んだことがなく、理論に惹かれたというよりは「獄中一八年」への敬意が大きかったと振り返られている。そして、大学受験を目指すようになる中で、政治活動が続けるのは無理だと考えて離党したという。これは通常「共産党員」ということから連想されがちなイメージとは相当かけ離れている。一つには、著者が育ったのが大都市とは遠い農村部であり、知識人たちとの接触もほとんどなかったという事情が関係しているのかもしれない。

とにかく著者は一九五〇年に離党し、五五年秋に復党したとのことなので、いわゆる「一九五〇年問題」——コミンフォルムによる日本共産党批判と、それを受けた「所感派」「国際派」の分派闘争——には全く関与していなかったらしい（東京大学に入学したのは五三年なので、五二年のメーデー事件にも関与していなかった）。五〇年代の日本共産党というところと連想されるのは、武装闘争方針とか分派闘争の中でのリンチ事件等々だが、それらと著者は無縁だったらしい。一九五五年七月の第六回全国協議会（六全共）はその大きな方針転換によって多くの党員にショックを与えたことが様々な人たちによって伝えられているが、その直後に復党した著者は、とりたててトラウマを引きずることもなく、比較的淡々とその後の歩みを辿ったように見える。復党後、形式的にはかなり長いこと党籍をもっていたようだが——正式かつ最終的に離脱したのは一九七〇年とのこと——高校時代と違って党活動にのめり込むこともなく、研究の内容に直接反映することもあまりなかったように振り返られている。ある意味ではやや奇妙なことに、党籍のなかった大学一、二年生の時期に「非党員の活動家」として学生運動に従事した一方、三年生の半ばに復党した後は、実践活動よりもむしろ学業重視に転じたようである。本格的な研究者の道を歩み始めた後も、労働問題という分野の性格上もあって遠い目標は「社会主義革命」と意識されていたようだが、それが近い時期の現実的課題と意識されていたわけではなかったようである。

そういうわけで、研究者として歩み出してから後の時期については著者自身が直接政治運動と関わったことはないようだが、それとは別に、一九六〇年代末から七〇年代初頭にかけての時期の大学事情——学生側からは「東大闘争」、教官側からは「東大紛争」——については若手教官として関与したことが物語られている。当時に助教として関わっていた著者は、もはや「学生側」ではなく「当局側」だったわけだが、発端となった医学部処分問題およびその後の東大執行部の対応に納得がいかなかった面もあったようで、何人かの同僚とともに独自の收拾工作を試みたことが回想されている。この時期の教官たちの動き——いわゆる「造反教官」もいれば、水面下での交渉を試みた人たちもいた——について

\* 戸塚秀夫氏がリンチ事件の被害者となったというのは有名な話で、以前から知っていたが、中西洋氏が都学連の委員長だったとか、山本潔氏が一九五四年にも非公然活動に参加していたというのは本書で知った（ひよっとしたら、昔どこかで聞きかじったかもしれないが、記憶がはっきりしない）。こうした人たちに比べ、当時党籍のなかった兵藤氏の関与は「挫折」とか「トラウマ」ということをあまり感じさせないものになっているような気がする。

はこれまでも一定量の情報が知られているが、本書の第IV章はそれを別の角度から補充するものになっている。当時の大学闘争は、昨年から今年にかけて五〇周年を迎えたこともあつて一部で関心の高まっているテーマだが、本書もその歴史的研究のための素材となるだろう。

より広い社会主義との関わりについては、あまり詳しく語られていないが、ところどころで簡単に触れられている。早い時期には「変革目標としての社会主義」といった観念をいっていたことが明らかだが、その後の知的変容について、いくつかの個所で簡略ながら率直な述解がある。一九六八年の「プラハの春」が軍事介入で押しつぶされた後の状況について尋ねられたときの応答としては、「社会主義国の個々の行動には非難に値するものがあるが、それによって社会主義の理念そのものを捨て去ってはならないのではないか」と思っていました」と語られている(四一七頁)。定年退官時の「告別講義」(一九九四年)については、「若かりし頃社会主義というものに夢を抱いたことがあります……ソ連解体以来、社会主義の魂が死んだと思っているわけではありませんが、「システムとしての社会主義は幻想ではないか」と思うようになりました」という「告白」をしたと述べられている(四三二頁)。そして、その数年後に、長年の研究のとりまとめとして刊行した『労働の戦後史』(上下、東京大学出版会、一九九七年)は「社会主義をあきらめた上で書いています」とある(四九六頁)。こういう軌跡は、日本のある世代の社会科学者にかんりの程度共通したもののように思われる。考え方が変わること自体は自然であり、驚くに値しないが、変化を引き起こした契機としての社会主義圏の動向についての分析めいたものはない。著者の専門からしてそれは無理からぬことではあるが、多少残念な思いがしないでもない。

\*4 小熊英二『1968』(新曜社、二〇〇九年)の上巻、第一〇・一一章、小杉亮子『東大闘争の語り——社会運動の予示と戦略』(新曜社、二〇一八年)、富田武『歴史としての東大闘争』(ちくま新書、二〇一九年)はいずれも学生側の動きに力点をおきつつも、ある程度教官側の動きも追っている。それ以外にも関連文献はかなり多数ある。

\*5 なお、共産党に籍のあった教官は少なくない数にのぼったはずだが、彼らに対して党指導部の側から何らかの方針が出されたというような話はこれまで聞いたことがない。学生だった共産党員たちに対しては党中央から強力な介入があり、現場で活動していた学生たちと党中央の間の軋轢を生み、それが後に多くの学生党員の離反を招いたことが知られている(当事者の回想として、川上徹・大窪一志『素描・1960年代』同時代社、二〇〇七年)があり、距離をおいた地点からの研究として、小杉、前掲書が詳しい)。これに対し、教官党員に対して党中央がどういう方針をとっていたのかは、これまでのところ全く分からない。明確に「反党的」な行動をとらない限りは放置していたのだろうか。

ない。

本書全体の中では相対的に軽い扱いだが、(そして、実をいえば私自身ともに読んでいないのだが)戸塚秀夫・中西洋・兵藤釗・山本潔『日本における「新左翼」の労働運動』(上下、東京大学出版会、一九七六年)の位置づけも気になる。一九六〇年代後半から七〇年代初頭の時期にある程度の高揚を見た「新左翼」運動はその後、全く取りあがるに足りなかったものと見なされるようになり、まして学生運動ならぬ労働運動については「そんなものは存在しなかった」というイメージの方が優勢だろう。いまから振り返ってそう見えるのは自然だが、当時の現実として、日本を代表する労働問題研究者四人がかなりの精力を投入して数年間にわたる共同調査・研究を遂行し、上下二巻にもものぼる分厚い書物を刊行したという事実は残る。研究対象にどのような評価を与えるかは人様々だとしても、少なくとも「何の意味もない」という前提に立つならこういう仕事はなされなかっただろう。たとえ手放しの共感ではないにしても、なにがしかの有意義性を認めたらこそ、この四人はこの作業に取り組んだはずである。それはいまから見ると一つの幻想だったということになるかもしれない。だが、ある時代にある範囲の人々をとらえた幻想というのは、それ自体が一つの歴史的事実であり、歴史的検討の対象たりうるはずではないだろうか(労働問題研究史としては意味が薄いとしても、戦後日本精神史の一コマとして)。

この回想におけるこの書物に関する記述は淡々としたもので、調査研究を始めた頃の時代認識としては世界的な「危機の深化」というものがあつたが、一九七〇年代後半ともなると「いまや資本主義は危機に陥っているとは言えませんでした」としている(二七四・二七五頁)。漠然たる印象として、兵藤さんは四人の中で一番醒めていたのではないかという気がする。戸塚さんも中西さんも世を去つたが、もし山本さんが回想を書いたなら、この点はどのように振り返られるだろうか。

(二〇一九年一月)

\*9 いままでは記憶も定かなくなっているが、私は労働問題をかじっていた時期に何度か、末期ソ連の労働問題に関わる研究報告めいたことをしたことがある。そのうち少なくとも一回は兵藤氏も出席していたはずだが、どのような議論を交わしたかは覚えていない。当時の私は若手研究者としての歩みを始めてまもない時期で、個別のテーマについてはそれなりにきちんと調べたり考えたりして、一応まともな報告をしたはずだと思うが、「社会主義とは何か」「ソ連とはどういう国か」といった大問題について鮮明な結論を出して大先輩に強い印象を残すことはできなかった(今でも、どれだけできるか自信がない)。本文に「残念」と書いたのはそうしたことを念頭においている。この時期に書いた文章としては、塩川伸明『ソヴェト社会政策史研究——ネップ・スターリン時代・ペレストロイカ』東京大学出版会、一九九一年、「クレーダー・経営者団体・労働組合」東京大学出版会『UP』一九九一年一〇月号がある。